

発表内容概要

Title: The preamble to the Constitution of Japan is the thought of Kitaro Nishida

Author: Takashi Ohta

日本国憲法前文は西田幾多郎の思想 太田 隆

日本国憲法前文「いずれの国家も、自国のことにみに専念して他国を無視してはならない」「人間相互の関係」「国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ」という文章は西田幾多郎の「世界新秩序の原理」文中「何れの国家民族も単に自己自身によって存在することはできぬ」「全世界において自己自身の位置を占める」「密接なる関係」といった文言と著しく類似している。日本国憲法前文には「永遠」「行為」「自覚」など西田哲学の基本用語が使われており、両者には十三箇所同じ言葉が使われている。日本国憲法本文には五十箇所近く『善の研究』と同じ熟語が使われている。従来 GHQ によって起草されたとされてきた日本国憲法であるが、西田の高弟といえる元首相近衛文麿と秘書の細川護貞が西田と一九四五年二月十五日に面談しており、西田の日記、書簡、『細川日記』などからこのとき西田は近衛に「世界新秩序の原理」の原稿を見せてその話をしていることが確かめられる。西田は同年六月に逝去し、近衛は終戦後憲法草案の作成を天皇・GHQ から依頼され、西田の弟子佐々木惣一京大教授とともに天皇に奉答したが、これにも「世界新秩序の原理」の影響が見られることから、近衛は「世界新秩序の原理」の写しをもとにこれを継承しながら日本国憲法前文の草案を作ったと考えられる。日本国憲法前文の思想は西田の一即多、多即一、西田の「世界主義」の思想であり、西田の世界史的世界形成の国際協調思想であると思われる。近衛は同年十二月に自殺するが、GHQ 民政局の高官らがこれを継承し、日本国憲法作成に当たったとみられる。これを日本国憲法制定の法制史からもたどり、さらに日本国憲法に見られる『善の研究』などを通じた西田思想の導入について若干ふれたい。西田、近衛、吉田茂らの戦中戦後史からその過程を思想的・歴史的にたどってみる。